

令和4年度 第1回子どもの貧困対策連絡会議 報告

1 開催日時及び会場

- (1) 日時 令和4年8月29日(月) 午後2時～午後4時
- (2) 会場 ながおか市民防災センター2階 研修室

2 出席者

山川委員、八木委員、内藤委員

長岡市社会福祉協議会、長岡市パーソナル・サポート・センター、フードバンクながおか
子どもみらい食堂

小池アドバイザー、板山教授(講師)

子ども未来部長、生活支援課、福祉課、人権・男女共同参画課、学務課、学校教育課、
保育課、子ども・子育て課 職員26名

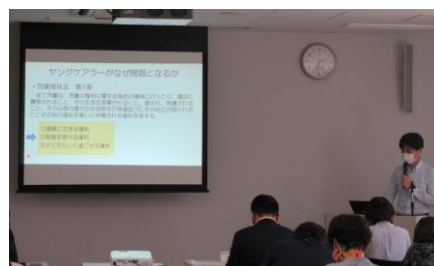
3 会議内容

- (1) 長岡市子どもの貧困対策連絡会議について
- (2) 長岡市子どもの貧困とヤングケアラーの現状について
- (3) 講話「ヤングケアラーの理解と支援について」

講師 長岡崇徳大学看護学部看護学科
精神看護学教授 板山 稔 氏

- (4) グループワーク

- (5) アドバイザーからのまとめ



ヤングケアラーの理解と支援について

4 議事(1)～(5)に関する結果及び意見等については下記のとおり

- (4) グループワークでの意見・質問等

- ・ヤングケアラーに対するイメージが変わった。これまでヤングケアラーとして頑張っている子を、かわいそうな子として、一面だけで見ていた。多大な負担を客観的に評価できずにいる子であると気付いた。
- ・お手伝いとヤングケアラーの線引きは？の質問に対して、板山教授からレットテルはりして分けるよりも、周囲の大人が決めつけるのではなくて、子の様子、家庭状況を見ながら、その家庭のことを思い描いて想像して対応してゆけばよいとの回答があった。
- ・ヤングケアラーが疑われる児童生徒への声掛けは難しい。「がんばっているね。」はヤングケアラーにとって受け入れにくい言葉なのか？どんな言葉を掛けたらよいか？の質問に対して、板山教授から、声掛けはよいことだが、そこで終わらず、「大変なことない？」「困ったことがあったらいつでも相談してね。」など、一言二言付け加えることが大切だと助言があった。
- ・これまでの経験から、非常に歯がゆい思いをしたケースがある。保護者が受け入れない家庭に対してどう支援につなげていけばよいか。子どもの気になっていることから言葉をかけてはどうか。責めるではなく、「どうした？」と気にかけているのだと伝えることが大切だと気付いた。

(5) アドバイザーからのまとめ

- ・子どもナビゲータからの報告にあったように、今年度貧困が疑われる事例は300件で年々増えてきている。児童生徒数は減少傾向にあるので、割合的には確実に増えている。教員の感度が上がったこともあるが、新型コロナウイルスの影響、物価の値上がり等、厳しくなるばかりで、良くなる要素は見当たらない。実際はもっと隠れていると思って見守っていききたい。
- ・経済的に困窮する家庭が要支援と経過観察を行ったり来たりするのは当然のこと。北九州の奥田知志さんの提唱する「伴走型支援」のように、「つなぐ」「(地域に)戻す」「つなぎ直す」のプロセスの中で支える必要がある。いずれにしても、支援者が集まるこの会議で、こういったデータが共有されることが大切である。
- ・ヤングケアラーについて、いろいろな定義がされている。さらに「判断しなくてよい判断を子がさせられる。」を付け加えてほしい。母子家庭において親の精神疾患の治療について子が判断せざるを得ないなど、親の人生を子が決定するということは酷である。子の意見表明を大切にすることと、親のことを決めることは区別しなければならない。
- ・「大人との接点はいろいろあったが、自分に介入してくれるもう一步の声掛けが無かった。」と板山教授は体験談として話してくれた。これは支援者のよくないところで、話を聞いた限りは解決しなければと思い込んでいる。つなぎ先の社会資源がないとどうしても感度が下がってしまう。今ある社会資源で使えるものはないかとアンテナを立てることで、支えるものにつながる。
- ・最後に、「精神疾患やこころの不調、生きづらさを抱える親および家族をもつ子ども」をケアするため、子どもとそのまわりの大人に対し、絵本やテキスト、情報サイトなどを通して必要な情報を届け、精神保健の普及啓発と子育て支援に寄与することを目的とするNPO法人「ふるすあるは」について紹介があった。



グループワークの様子



アドバイザーからのまとめ